# 主張に整合した具体例を挙げて論理的な文章を書く

## ―「若者言葉について考えよう」（五年）の実践から

新潟県新潟市立新津第一小学校
藤井　正人

### 目指す子どもの姿

序論（はじめ）・本論（なか）・結論（おわり）の構成を学習した子どもは、その構成で文章を書く。しかし、形式上はその構成になっているだけで、内容を読むと、序論・本論・結論の三つが論理的に整合していなかったり、関連が弱かったりする文章が多い。

そのような実態から、序論・本論・結論の整合や関連が図られた文章、すなわち論理的な文章を書く子どもを育てることが、私の大きな実践上の課題となっている。特に、自分の生活経験や既習内容の中から、序論と結論で述べた主張を裏付ける適切な具体的事例を考え、それを的確に書く子どもを目指している。

本稿では、「若者言葉」を題材とした文章を書く学習を通して、論理的な文章を書く力を高める指導方法を提案する。

### 指導の構想

**①単元の学習計画（全八時間）**

**第一次（二時間）**

・教科書教材「日本語を考える」（教育出版）を読み、日本語の特性を知る。

・教科書教材の続編として、「若者言葉」を使っている事例を二つ読み、「若者言葉」に関心をもつ。

**第二次（三時間）**

・「省略した言い方」と「あいまいな言い方」の二種類に分けて、「若者言葉」を集めさせ、それを使った会話例を書く。

**第三次（二時間）**

・「あいまいな言い方」の会話例を挙げて、「若者言葉」に反対する文章を書く。

・「省略した言い方」の会話例を挙げて、「若者言葉」に賛成する文章を書く。

**第四次（一時間）**

・「『若者言葉』を使っている人へ」という文題で意見文を書く。

**②論理的な文章を書く力を高める指導方法**

単元の中で中核となる時間が、第三次の二時間である。この二時間で身に付けた力が第四次で書く意見文に発揮される。各一時間における指導方法は以下の通りである。

まず、「前文と主張が書かれている序論」（教材文A）を提示し、本論の内容を問う。これにより、子どもは、日常生活やこれまでの既習内容と教材文Aとを関連付けて、本論で挙げる事例を考える。

次に、「事例のまとめと主張が書かれている結論」（教材文B）を提示し、本論の内容を再度問う。これにより、子どもは、考えた事例を見直し、説明を付加したり、書き方を変えたりする。

この二つの学習過程を通して、子どもは、論理的な文章の書き方を学ぶ。

## 学習の様子（第三次一時間目）

### ①序論を読み、本論で挙げる事例を考える

次の教材文Ａ（自作）を提示した。

**日本語を勉強している留学生のＡ君へ**
**（序論＝教材文Ａ）**

> あなたが電車の中で聞いた若者言葉で、「　」や「　」という言葉がありましたよね。その若者言葉は、相手から気持ちや理由などをたずねられて答えるときによく使われます。
> 私は、その若者言葉は使わない方がよいと思います。なぜなら、その言葉を使うと、はっきりしない答えになるからです。
> それでは、そのような会話例を紹介します。

まず、「　」に当てはまる言葉を挙げさせた。子どもは、教材文の「はっきりしない答えになる」という記述を基に、「～的には」「っていうか」「びみょう」「～し」という「あいまい言葉」を挙げた。

次に、「あいまい言葉」を使った会話例を記述させた。子どもが書いた主な会話例は、次の通りである。

> **ア** ａ「昨日みたテレビはおもしろかった？」
> ｂ「うーん、びみょうだね。」
>
> **イ** ａ「動物園と遊園地どっちに行きたいの。」
> ｂ「私的には、遊園地に行きたいなあ。」
> **ウ** ａ「どうして、昨日家に遊びに来てくれなかったの。」
> ｂ「だって、急に用事ができちゃったし。」
> **エ** ａ「あの映画どうだった？」
> ｂ「すごくおもしろかったっていうか。」

### ②結論を読み、①で挙げた会話例を見直す

次の教材文Ｂ（自作）を提示した。

**結論＝教材文Ｂ**

> このように、気持ちや理由などを答えるときに、そのような若者言葉を使うと相手は迷ってしまうのです。だから、若者言葉を使うよりも、ふつうの言い方をした方がよいと思います。

まず、Ｂのような結論を書く場合、本論はこのままでよいかと問うた。

子どもからの意見を次のようにまとめた。

・「相手は迷ってしまいます」という記述があるので、会話例の後に、相手がどのように迷うのかを説明した方がいい。
・「ふつうの言い方をした方がいい」という記述があるので、普通の言い方も書いた方がいい。
・「～よりも、～の方が…」とあるので、普通の言い方と比べるように書くといい。

次に、右の意見をふまえて、会話例アの後に続けて記述させた。

ある子どもは、つぎのように書いた。

> ａ「昨日みたテレビはおもしろかった？」
> ｂ「うーん、びみょうだね」
> ふつうなら、「あまりおもしろくなかった」と言います。これと比べて、ｂのように言うと、そのテレビはどうだったのか、相手は迷ってしまいます。

このように、子どもは、序論と結論を基に、相手を迷わせる「若者言葉」の会話例を、普通の言い方と比べながら書くことができた。

## まとめ

本時は、序論及び結論と整合・関連させて、どのような事例を選び、それをどのように書いたらよいかを考える学習である。それは、まさに今日的課題でもあるＰＩＳＡ型読解力を高める学習でもあると確信している。

**ふじい　まさと**　新潟音読研究会に所属し、実践研究をしている。「暗唱・音読」「論理的思考」「聞いて話す力」の三つを実践のキーワードにしている。